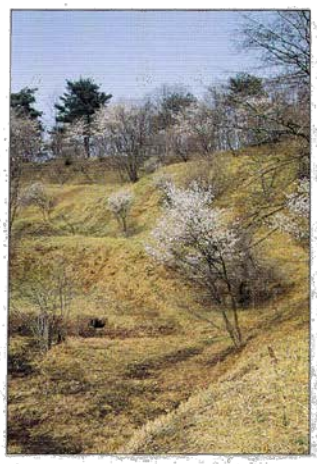
城館分布図

●高月城



●滝山城

●八王子城(御主殿の滝)

●浄福寺城

◇散歩のみどころ

都道六十一号線のグリーンタウン入口バス停から陣馬街道の切通しまで凡そ四kmの行程。小田野トンネル手前から、中世の城跡小田野城に入る。鎌倉古道を歩き、武田信玄の娘松姫が剃髪した心源院へ。ここから旧案下道（旧陣馬街道）を通り、再び鎌倉古道を歩いて市指定のキンモクセイを垣間見る。また陣馬街道に出て、渡った先の八幡神社へ。その後、北浅川沿いを歩き、小田野中央公園まで行く。ここから新撰組隊士中島登出生の地碑を見、再度陣馬街道を横断して、安下道道標を見て、観栖寺へ。観栖寺から、恩方市民センターへ。その後、旧案下道の霊照庵、菅原神社を参拝。村民の開削願いの提出で実現した切通しへと至る。さらに、日枝神社を参拝後、渡来銭発見で有名な法泉寺に着く。ここで解散。

①小田野城跡 国

西寺方町一四五外

小田野城址は、八王子城の出城と考えられ、北条氏照の家臣小田野源太左衛門屋敷跡の伝承をもつ戦国時代の城郭跡である。案下道（陣馬街道）を見下ろす防御拠点に位置し、独立丘状の地形を利用して築かれ、八王子城城落と共に荒廃したと考えられる。

主郭部分は広範囲にわたり、後世の改変を受けているため、往時の状態は明確ではない。二ヶ所の郭構成であったと推定され、その周囲に数段の腰曲輪があったかと思われる。

昭和五十四年から五十五年（一九七九～八十）に行われた本調査では、北側に二段の腰曲輪、南側では土橋、堀、枡形状遺構など防御施設が発見され、陶磁器類の破片や古銭、鉄砲の弾などが出土している。

鎌倉古道

小田野トンネル　国道６１号線

小田野城跡調査の全景
（東側より）

土塁または遺構跡

小野田城跡（城上の広場）

土橋（東より）

腰曲輪（北より）

枡形状遺構（北西より）

②深澤山心源院

下恩方町一九七〇

宗派　曹洞宗
本尊　釋迦如来
寺宝　四脚門（室町時代の古建造）
開基　大石道俊定久
開創　延喜年間（九〇一～二三）

戦国時代には北条氏照などの在地武士階級の帰依を受け繁栄した。天正十年（一五八二）、当時の住職卜山舜悦（随翁）は武田信玄の娘松姫を手厚く擁護した。寺の門前には、川原宿の名主関口八兵衛が寄進した六地蔵が建っている。寺内の墓地には、下原刀匠山本照重一家の墓、天然理心流の山本満次郎最武の墓がある。山門近くには、この地域で医術に貢献した小谷田子寅の碑が建っている。

六地蔵の中で
一番大きな地蔵

心源院本堂

四 脚 門

●ト山舜悦和尚

舜悦和尚は名を随翁といい、ト山と号した。永正四年（一五〇七）二月五日南多摩郡川口村奈良原（現在八王子市楢原町）の農家に生まれた。舜悦の母は霊感で身籠ったという。母の両親は、その夫が分からないまま産まれたことを強くはじて母を追い出してしまった。母は児を背負い越津（小津）の山中をさ迷い（山入村、美山町説もある）思い余って我が児を滝の沢辺りの老松の根元に捨てた。三日後、再び捨てた場所へもどってみると、児はすこぶる元気なのに驚き、家に連れ帰り大切に育てたという。また、一説には、方丈さんに拾われたという。捨てた場所を今でも「餓鬼ガ谷戸」と呼ぶ。

長ずるに及び総敏衆に超え、書は一覧してよく記憶する程であった。十三歳の時、山田の広園寺に出家し翌年落髪して具戒を受ける。その後諸方を遊暦する。天文六年（一五三七）の秋、舜悦三十一歳の時、越前（福井県）の永平寺で承陽大師（じょうようだいし／道元の諡号）から法を受け、修道大に進む。

弘治年間（一五五五～五八）恩方村（八王子市下恩方町）心源院に帰る。この時、北条氏照はまだ滝山城にいたが、既にその高風を慕って親しく教えを受けたという。その後、八王子城に移っても和尚を深く帰依し、「朝遊軒」という一屋を城内に設け、武将を集め一味禅談に心酔したという。北条氏照が八王子城主として、その高名を謳われた所以の一つに舜悦の力は大きい。当時、氏照の夫人比佐、信玄の息女松姫、片倉城主大江備中守師親、千人同心組頭石坂森信らも和尚から教えを受けたという。

これより先、氏照は永禄九年（一五六六）牛頭山（朝遊山）宗関寺を創建し、舜悦を請いて開法した。相州小田原城主北条氏康も和尚を城中に招き、終日法を問い、戒を受けた

という。また百五代正親町天皇より、仏国普照禅師の勅号と紫衣を賜っている。これらを見ても、卜山舜悦が如何に偉大な禅僧であったかが解る。

天正元年（一五七三）の秋、和尚は心源院に遷り、天正十七年（一五八九）には遠州（静岡県）石雲寺、翌年牛頭（宗関寺）に帰った。暫くして再び遊方し、至る所で化導した。郡人の地をすて禅宇を多く建てた。宝樹寺（裏高尾町）、暉窓寺（下恩方町、廃寺）興岳寺（千人町）、雲竜寺（山田町）、良泉寺（上恩方町、廃寺）、信松院（台町）の諸刹は舜悦和尚が第一世となる。

寛永元年（一六二四）秋、宗関瑞聖に赴き、寛永三年（一六二六）十月二十六入定帰寂。時に百二十歳古今まれに見る高齢であった。

卜山舜悦和

卜山舜悦和尚の墓
後方ひだりより六番目

●松姫の生涯

松姫は、永禄四年（一五六一）に府中（山梨県甲府市）のつつじが崎の屋敷で生まれた。父親は戦国時代の武将で、甲斐の国を中心に活躍した武田信玄。母親は、油川信友の娘で油川夫人と呼ばれていた人である。

永禄十年（一五六七）十一月、松姫七歳の時に織田信長の長男信忠（十一歳、奇妙丸）と婚約した。

元亀二年（一五七一）、松姫十一歳の時に、母油川夫人が亡くなる。翌年には、武田家と織田家が敵、味方に分かれてしまい、信忠との婚約も解消された。さらに天正元年（一五七三）四月には信玄が亡くなる。織田家は武田家を滅ぼそうと攻めるようになった。武田家が滅亡する天正十年（一五八二）一月下旬から三月下旬ころ、松姫は高遠城の兄、仁科盛信のもとに身を寄せていたが、織田軍の武田征伐が始まり、戦禍を避けるため、盛信の三歳の姫、新府城

の勝頼の四歳の姫、人質として預かっていた小山田信茂の養女四歳の姫三人と、少数の供を連れ金照庵へと旅立った。高遠城（長野県高遠）から、新府城（山梨県韮崎）→入明寺（甲府市）→開桃寺（現、塩山市の海島寺）→向嶽寺（塩山市）金照庵（八王子市上恩方）までの道のりであった。この年の六月二日、本能寺の変が起こり、信忠が亡くなった。同年の秋、金照庵から心源院（八王子市下恩方町）に移った松姫は剃髪し、名を「信松尼」と改め、信忠をはじめ武田家一族の冥福を祈った。

心源院で八年間の修業を積み、天正十八年（一五九〇）の秋、御所水の里（八王子市台町）のあばら家に移り住んだ。尼としての生活を送りながら、姫たちを育てた。収入は、寺子屋で近所の子どもたちに読み書きを教え、織物を作ることで得ていた。織物は、蚕を育て、糸を紡ぐことから始まり、織りまで一連の作業をこなしていた。

松姫の織り方が八王子織物の元になったと伝えられている。また、旧武田家家臣であり、当時江戸幕府代官頭の大久保長安や八王子千人同心の援助を受け、現在の八王子市台町に信松院を開基。元和二年（一六一六）死去。享年五十六歳。この寺には、戦前まで境内に松姫が植えた松（案下峠の松）があったが、昭和二十年（一九四五）八月の八王子空襲で焼失。

松姫は、墓域の一画で静かな眠りについている。

松姫坐像

●小谷田子寅（こやたしいん）の碑

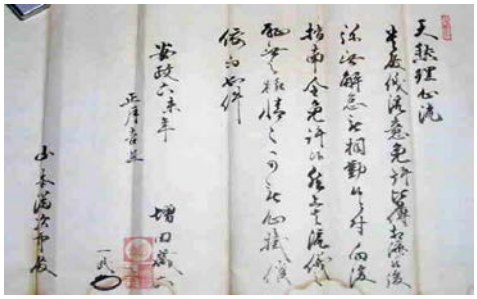
小谷田子寅は、千人同心の一人で、名を権右衛門昌亮と言う。宝暦十一年（一七六一）武蔵国多摩郡川口村（現・八王子市川口町）に生まれる。幼くして父親を亡くしたが、勉強に励み特に医学に明るかった。薬を乞う者、診断を求める者があとを絶たず、民衆に慕われていたという。この善徳を称えるため、天保七年（一八三六）に境内山門近くに碑を建てた。この碑は同心組頭塩野適斎の撰文、植田孟縉が揮毫ならびに刻字した大変貴重な碑である。碑面には三百八十六文字が刻んである。

小谷田子寅の碑

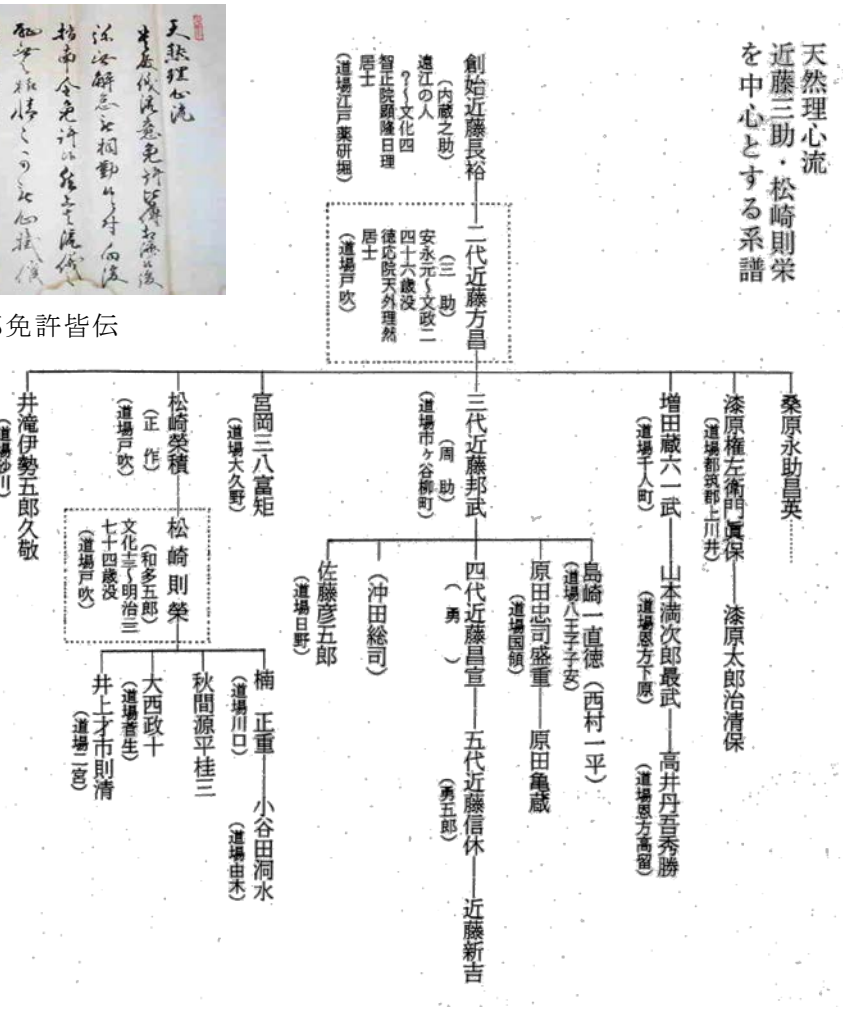
●山本満次郎最武の墓

天然理心流四世山本満次郎最武の墓は、四脚門の脇にある。満次郎最武は、頭脳明晰な人であったといわれ、増田蔵六から指南免許を得た唯一の人物である。近藤三助、松崎則栄らの天然理心流を継ぎ、恩方下原の道場で門下生たちに天然理心流はもとより、静流薙刀、観世当流小謡、小笠原流諸礼躾方など幅広く教えていた。

山本満次郎最武の墓



山本満次郎免許皆伝



天然理心流　近藤三助・松崎則栄を中心とする系譜

●宇賀神

穀物の神。転じて福の神とされ、弁財天と同一視された。天女形の像が多い。また白蛇を神として祀ったもの、狐を神とする説もある。以前、心源院の宇賀神様の周りは池だったという。石の蛇像の首は無くなっている。

石の蛇塚

宇賀神像

●今も残るヒューム管

昭和二十九年農業電気揚水（十五馬力）が、国と都の補助金で小田野地区に完成した。小田野地区の水田耕作は、観栖寺前の芦が沢からの湧水を利用。動力ポンプで地下水を汲み上げ、灌漑用水として利用するものであった。段丘崖の横腹にヒューム管を通し、水は心源院の西を流れる北浅川からも汲み上げた。その長さは八百mに達し、用水の受益面積は約八haに及んだという。

今も残るヒューム管

●秋葉神社

祭神　軻遇突知命（かぐつちのみこと）
創建　不詳
例祭　八月十七日

元文二年（一七三七）、別当心源院二十一世及び関口八兵衛により社殿を造営。防火の神として崇敬されている。

秋葉神社

③小田野のキンモクセイ

西寺方町の淵上家の庭には、幹の太さ八・六m、高さ十一m、樹齢約二百五十年以上というキンモクセイがある。幹は三裂し、十月初旬の開花時には芳香を放っている。昭和四十七年（一九七二）十月、八王子市天然記念物に指定された。

小田野のキンモクセイ

●木食白道（もくじきびゃくどう）

白道は宝暦五年（一七五五）甲斐国山梨郡上萩原村上原(甲州市塩山)に生まれる。幼少期の宝暦十一年(一七六一)に曹洞宗寺院の法幢院で出家し、父とともに廻国納経の旅に出る。「古日記」によれば四国八十八ヶ所巡礼の途上で父を失う。安永七年（一七七八年）に蝦夷地へ渡ってから木喰（行道）の弟子とる。白道は様々な仏を制作しているが、木喰があらゆる神仏を彫っているのに対し、白道は子安観音や地蔵菩薩、薬師如来、恵比寿・大黒、観世音菩薩、子安観世音菩薩、不動明王を主としている。また、宇賀神なども彫っている。白道仏は銘のないものも多いが、一部の像には木喰仏と同様に背銘に「南無阿弥陀仏」の六字名号があり、笹字の書体で記され、「陀」の文字に特徴がある。特に、恵比寿大黒天像は生涯にわたって制作し、初期の作例は独尊の対像であるが、後に一材で中央を分割し、恵比寿・大黒を彫った双体形式となる。裏面には笹字による書が四行分記され、焼印も押されている。また、白道は仏像を刻んだ他に養蚕守護などの御札を出していた事が知られている。八王子市日の出町大久野では地蔵菩薩の御影札が、福生市では類似した五輪塔の御札が確認されている。とくに八王子市小宮町の旧家関根家からは白道の縁の寺から出されたもの、各地を勧進して廻り、自ら民家に与えたと考えられる御札が発見されている。文政八年(一八二五)十二月二十四日没。

恵比寿大黒天
木食白道　作

＊木食（もくじき）とは、
出家した後、米、野菜を食さず、木の実、山菜のみを食して修行する僧をいう

木食百道の御守り
左端の包みの中に三枚の御札が入っている

白道の六字名号の書体

④鎌倉古道

西寺方町（中小田野）

鎌倉街道は、中世の道の名である。鎌倉幕府の所在地へ、各地から向う道の総称であり、鎌倉古道、鎌倉道ともいう。

主なルートは三本ほどあり、上道、中道、下道と呼ばれ、さらに脇道があった。山の根（脇道の一つ）は、現在の市域のほぼ中央部を南北に縦断。今のあきる野市の網代辺りから秋川を渡って上川町に入り、美山町、下恩方町、元八王子町、長房町、舘町を通り、恋路を越えて町田市相原町にでた。恋路坂のルートは、別名横山道ともいわれ、現在も辿ることができる。なお、高尾から南の道は、現在町田街道として利用されている。

鎌倉古道

鎌倉古道（西寺方町）

⑤小田野の八幡神社

西寺方町（中小田野）

勧請　不明
祭神　応神天皇
創建　不詳
例祭　九月十五日

文化四年（一八〇七）五月造営。昭和八年（一九三三）社殿を再建した。ちなみに、「八幡」と名の付く神社や地名は、市内で二十五以上も存在している。

八幡神社鳥居

小田野新道開通記念碑

●小田野新道開通記念碑

この碑は八幡神社の境内にある。江戸時代以来、上宿、上野原、元木、大幡など浅川左岸を迂回して、通っていた佐野川往還（案下道）は、明治十七年（一八八四）神戸と下小田野の境を切通し、新たに川原宿に至る直線の道路を作った。碑文の内容には、新道開設の意義と、これを成し遂げた地元住民の喜びと情熱が伺える。

⑥小田野中央公園

西寺方町（中小田野）

平成二十年、北浅川沿いに広大な小田野中央公園が開園した。元木橋のたもとから、北浅川上流の左岸に沿って、八王子福祉園までの約六百m続く細長い場所である。

この土地は、昭和五十五年八王子市が東京都から河川占用許可を受け、小田野児童遊園として開園していた。その後、公園の半分を恩方地区の防災訓練場を兼ねた運動公園とし、西側にこかげ広場、さらに芝生広場が平成四年までに整備された。そして、残りの北浅川下流方面の整備を終え開園の運びとなった。

川縁には、数百mに渡り河津桜が植えられ、春には見物客で賑うという。

小田野中央公園（河津桜）

⑦新撰組隊士
中島登出生地之碑

西寺方町（中小田野）

天保九年（一八三八）二月二日、西寺方村の千人同心の子として生まれた。小さい頃から乱暴者だったという。元治元年（一八六四）ごろ、仲間の同心を斬って離村。由木村の井上益五郎宅へ身を寄せる。その後、新撰組に加わり、井上登と名乗った。

土方歳三らと各地で転戦し、函館で捕らえられた。のちに遠州白須賀（静岡県浜松市）で開拓農民となった。帰郷途中の浜松で帝都の様子を知り失望。明治十二年頃、浜松の魚屋沢木半平の長女よね二十三歳と結婚、登四十一歳であった。一時葉蘭作りを商いとしていたが、いつしか鉄砲火薬店を開くに至った。また、中島登は文才があった人で「中島登覚書」「幕末新選組絵巻」を残しており、甲州勝沼の戦い以降の新選組最末期の実態を後世に伝えた。

明治二十年（一八八七）四月二日、先だった妻の後を追うように五十歳で生涯を閉じた。

新撰組隊士
中島登　出生地の碑

中島登家の墓

⑧面影残す旧案下路

西寺方町（恩方市民センター裏）

八王子と山梨県上野原町を結ぶ道路。別称恩方街道、甲州脇往還、案下路、甲州裏街道、佐野川往還などと呼ばれていた。

昭和三十八年（一九六三）恩方街道を陣馬街道と改称。都道百四十号線となった陣馬街道は、追分町で甲州街道から分かれ、横川町、大楽寺町、西寺方町、下恩方町、上恩方町を経て和田峠を越え、神奈川県藤野町を通って、上野原町で甲州街道に合する。江戸期には甲州脇往還として利用され、上恩方の高留に口留番所が置かれていた。ちなみに「陣馬」は、昔「陣場」と記され、「野猿峠」は「猿丸峠」といわれていたのと同じで、京王帝都電鉄が観光目的の為に変えたと云われている。

大木の脇が旧案下路

旧案下路の碑

旧案下路に並ぶ庚申塔など

⑨観栖寺の参道

西寺方町（恩方市民センター裏）

観栖寺前に、グリーンタウン高尾方面に行く舗装道路が通っている。その道を渡ったところに農道と思われる道が北の方向に伸びている。観栖寺の参道という人もいる。

この小道を突き当たったところが旧案下路、いわゆる陣馬街道である。突き当りの右側に、三体の石仏が安置されている。

・六地蔵　天保九年（一八三八）
・如意輪観音（三界万霊）
・地蔵　正徳二年（一七一二）

また、旧案下路の碑をはじめ

・庚申供養塔　明和九年（一七七二）
・庚申塔　安政七年（一八六〇）
・夕焼け小焼け作詞のみち碑

など、欅の大木の脇に安置されている。

旧案下路と観栖寺に通じる古道

⑩補陀山　観栖寺（かんせいじ）

西寺方町二二三

宗派　曹洞宗
本尊　釈迦如来
開山　天球琳達上人
開基　熊沢三郎衛門
開創　年代不詳
中興　規外智範

慶安年間（一六四八～五二）に境内観音堂領朱印八石一斗を拝領。本堂は、天保年間（一八三〇～四四）、第十九世祖伝哲描上人により再建されたが、平成五年二月三日火災により全焼した。その後、再建され、今日に至る。

なお、詳細については、左記の文献を参照されたい。

「多摩のあゆみ七二号」
「夕焼けの里を訪ねて」
「多摩の歴史を知る会」

観栖寺山門

●夕焼けの鐘の碑

「ふるさとは　みな懐かしく
　温かし　今宵も聞かむ
　　夕焼けの鐘」

この詩碑は、観栖寺の参道の入り口近くに建っている。梵鐘は、昭和十七年（一九四二）、太平洋戦争中に強制的に供出させられたが、昭和四十二年（一九六七）に鐘が戻って来た。現在梵鐘は、普門閣の脇に堂が建てられ安置されている。

これを記念して、八王子の有名な童謡・童話作家中村雨紅（本名高井宮吉）氏が、「夕焼け」の名を送り、この詩を添えた。

ちなみに、上恩方町の宮尾神社には、「夕焼け小焼け」の碑。西寺方町の宝生寺には「夕焼け小焼け」の歌碑と男女の童子像。上恩方町の興慶寺には、「夕焼けの鐘」と、「ふる里と母と」の碑が、それぞれ建っている。

夕焼けの鐘の碑

普 門 閣

普門閣と鐘

●熊沢 序比（のぶかた） （ごっう）（兀雨）

熊沢序比の父は、九代熊沢七郎右衛門。千人町で医者を開業していた。

序比は、子供の頃より俳諧の道に入り、俳号は熊沢兀雨。白井鳥酔の門人で二世鳥酔。二世露柱庵。のち松原庵二世を継ぐ。文化五年（一八〇八）四月九日、七十九歳で没した。

諡（おくりな）は、

「松原庵熊沢序比鳥酔居士」

辞世の句は、

「土へ戻れ蕪やし冬木や春の風」

墓は観栖寺にあり、位牌は、明治六年（一八七三）、当寺に届けられている。観栖寺の境内には、俳句や和歌の石碑が数多く見受けられる。

●松原庵

松尾芭蕉の系譜を継ぐ伊勢派三庵の一つ。白井鳥酔、三世榎本星布、四世榎本井之、五世森田友昇、六世長田琴通、七世大野太虚へと継承され、地域文化人の拠点としての役割を果たしている。なお、追分の大野氏（八世、九世）を経て、今も引き継がれている。特に三世星布は、女流俳人として、加賀の千代女と双璧の地位にあった。

・松原庵を構えた時の句
散り捨てて柳も元のすがたなる

・建長寺入山した時の句
きぎす啼く山は無声の響きかな

・星布辞世の句
咲く花もちれるも阿字の自在かな

●化け地蔵（首切地蔵尊）

西寺方大幡川原から元木地区を通る元の佐野川往還（陣馬街道、案下道）に沿った竹藪の中に、化け地蔵と呼ばれる石の地蔵尊があった。

昔々、この地蔵が、夜な夜な化けて出ては往来の人馬を脅かしたという。

日が暮れると、この付近はパッタリと往来が途絶えてしまったという。これを聞いたある豪傑は「それなら妖怪の地蔵を退治して、村人の難儀を除いてやろう」と、或る夜密かに竹藪に忍んで行った。そして、かの地蔵尊の首を一刀のもとにはね飛ばしたという。以来この地蔵尊には首がない。現在、この地蔵尊は観栖寺に移設され、惣門の階段脇に安置されている。

化け地蔵

●小田野の地名考

鈴木樹造氏の「地名考」によると、小田野のオダは砂の方言であるイナがオナ、そしてオダと変化したものであるとしている。また、アイヌ語でもオダは砂を意味するという。

地形的に見ても、小田野の大部分は北浅川の氾濫原であった。川原宿の東に連なるこの地域もまた砂野であったと考えられるのである。

●水神と水天宮

我が国の民俗学では、山には山の神様が、川や泉には水神様が住んでいるとされていた。当地恩方地区でも、山の神様を集落ごとに社や祠を共同祭祠として祀っていた。水神様は、井戸、川の水辺などの飲用水、生活用水を得る場所に祀られていた。年の暮れには、神官が各戸ごとに訪れて、「おかまじめ」の行事をする。その際、青い色をした注連飾りを切り、家の水神様に奉げるというものである、水天宮は、弁天様とともに「水神」に属する。恩方地区では、小田野と大幡の二ヶ所にしか祀られていないという。

水神様が、飲用水など人々の生活に不可欠な水を司る神であるのに対し、水天宮は、おもに水害、水難から人々を守る神として、また安産の神としても崇められている。

●竹林と竹屋

小田野地区は竹林が多い。その理由は、長雨などで川が氾濫したり、地震の時など竹藪に逃げると安全であるからという。竹は、根張りが良く、土地が削られにくいからである。また、籠や笊などの日用品の材料としても利用できるし、筍は食料となり、皮は物を包む材料として重宝された。生活用具以外にも、建築や土木資材としても使われている。特に、竹を編んで蛇籠を作り、中に石を入

れ、水害から田畑を防ぐ護岸堤防として使用されていた。

地理的に、山入、小津、北浅川が合流する場所が近い小田野は、昔から幾度となく水害に見舞われていたことは間違いなく、むしろ竹林の多い理由はそこにあったと思われる。

また、この地区には竹屋が多いことで知られており、現在「竹屋」という屋号の平野商店もその一軒。

⑪恩方市民センター

西寺方町（中小田野）

平成七年十一月一日開館。市内十二番目の市民センター。鉄筋コンクリート造り二階建て。地域のコミュニティ施設の役割を果たしている。

この付近は縄文時代中期中頃から後期にかけて、大規模な「土器捨て場」であった。多数の土器やその破片が出土しており、その一部をセンター内に常設展示している。

⑫霊照庵

西寺方町（下小田野）

宗派　真言律宗（江戸湯島霊雲寺末）
本尊　大日如来坐像
開山　霊照比丘（宝生寺一代）
開創　元文年間（一七三六～四〇）

本堂は、五間に六間。境内は一反歩ばかり。寺方村（西寺方町）小田野にあったが、明治初期廃寺となった。薬師堂のみ現存している。

十八世霊照大和尚は、正徳四年（一七一四）三月十九日に入山、享保十九年（一七三四）退山。

印塔には、十八世当庵開山霊照大和尚、裏に寛延三年（一七五〇）庚午歳十二月三日とある。

また、新しい墓石の正面には、凡字と十三仏の種子が刻まれている。裏には、昭和六十三年四月三日宝生寺三十八世秀寛建立とある。

●霊照さま

西寺方大幡の蓮華院宝生寺の住職が隠居して、同小田野の山中に庵を結んだ。この人が有名な霊照上人である。

この上人さまがある時、雇男にお礼の包紙を買ってくるようにいいつけた。男は、何を思ったか襷にする晒し木綿を一反買ってきた。それを紙に包んで、知らぬ顔で上人さまの前に差し出した。上人さまはこれを見て、「お前にやろう」と言ってくれてしまったと。

また、こんな話もある。霊照庵付近の山の木を伐っていた樵達が、庵の中で魚を焼いていた。ところが、いくら焼いても中まで火が通らない。そこで樵が庵の外に持ち出して焼いたところ、不思議にもすぐに火が通り焼けたという。

霊照庵の跡にはお堂が建っており、上人様かと思われる像が安置されている。上人さまのお墓は、その堂の

裏手にある。熱病やいろいろな悪病に御利益があるとして、各地からの参詣者が多く、ことに、正月元旦には最も多くの人達のお参りがある。そして、上人さまの墓石についた苔や香り葉、いわゆる「お苔」を持ち帰り、お守りにしているという。

霊 照 庵

お神酒を入れる真竹

霊照庵さまの墓

霊照庵さま

●伝通庵跡

小田野丘陵の「峠」の一つ下小田野「霊照庵」の直ぐ南の高台は、観栖寺の基になった千手観音堂、伝通庵（閣）があった場所といわれている。この場所は、南北に抜ける古道が通っており、眺望の良い所でもある。東南は現在の八王子市街をはじめ大山方面まで、西北は秩父から群馬方面の山々をも望めるという。

地名の「伝通」も、かつては狼煙台（のろしだい）があった場所と考えられ、伝達、通信から派生した名前だといわれている。

●千手観音

むかし美山方面の人達が、ある晩、巽の方角に光輝く物体が舞い降りるのを見たという。翌日探してみると、観栖寺の近く葦の沢に、千手観音が落ちていたという。観音様を拾い上げ、伝通庵に奉納した。この観音様

は、運慶の作と伝えられているが、専門家の話しでは隕石ということも考えられるという。

⑬小田野の菅原神社

西寺方町六一三（下小田野）

勧請　不明
祭神　菅原道真公
創建　不明
例祭　三月二十五日

社殿、本殿は流造。拝殿は神明造。承応三年（一六五四）、本殿並びに拝殿を造営するとある。その後、五度再建し、現在の社殿は戦火の後、昭和二十二年新築造営したものである。

菅原神社鳥居

本　殿

⑭切通し

神戸（弐分方）から小田野（西寺方）

切通しの入口に日枝神社がある。何時の時代に建てられたかは不明。ただ武蔵国由比の牧の守護神として大政官符により建てられたという伝承がある。鳥居の傍らには、庚申塔と地蔵が祀られている。

この辺りを神戸（ごうど）と呼び、弐分方町の旧小名であった。新編武蔵風土記稿に「西北の限り、山王林山の麓をいへり」とある。山王林山は日枝神社のある丘のことである。

ところで不便解消を願う西寺方の有志により明治十七年（一八八四）四月神奈川県に開削願いを出し翌年切り通しが完成した。これまでは神戸に通ずる道であったが、さらに小田野、川原、松竹の道が使えるようになり馬車や荷車が短時間で通行できるようになった。

三十八年後の大正十二年（一九二三）現在のバス通りに第二の切通しが完成した。ちなみにこの頃の恩方には荷馬車十五台、荷車百九十五台、人力車六台、自転車五百台、自動自転車三台だったという。そして案下、小津、醍醐に電灯が引かれ、牛馬の時代からエンジンの時代へと変わっていった。

翌年の大正十三年には八王子から川原宿まで開通、さらにその翌年には上案下まで開通した。当時、八王子と案下間で約五十分かかっていた。定員十二人の乗り合いバスが一日七往復していたという。

切り通し

日枝神社鳥居（左）切り通し

日枝神社

神戸の切り通し付近

⑮ 神戸山 法泉寺

大楽寺町八十四

宗派　臨済宗南禅寺派（広園寺末寺）
本尊　阿弥陀如来坐像（伝釋迦如来）
　　（高野山願行上人作）
開山　広園寺第十九世桃雲玄峯禅師
開基　関山土佐昌清
開創　文亀三年（一五〇三）

当山は、山田町兜率山広園寺の末寺で、開山の桃雲玄峯禅師は、永正二年五月十日に遷化。

開基の土佐昌清は、相州当麻宿出身。北条氏の家臣。法名を法泉浄如居士。北条氏の命により、八日市場を経営。明国から輸入した永楽銭を使い、貨幣経済を振興する為に当地に移り住んだという。

関山家は、元々四国の土佐の河野水軍の出。一遍上人との縁もある。

本尊の他に、十三尊仏像（文禄四年）鎮守の神には、四国金毘羅大権現大天狗小天狗、北野天満宮、秋葉

山三尺坊大権現、機守白瀧稲荷大明神などを祀っている。

昭和六十二年六月、庫裡客殿建設地より、明の渡来銭約二千枚が出土している。本堂は、民家を移築したもので、細い柱が幾つも使用されている。

現在、同宗派の廃寺となった無量院に変わって、八王子三十三観音第十七番札所となっている。

旧法泉寺山門と旧本堂

旧　本 堂 内（民家を移築した本堂）

新 法泉寺本堂

半鐘（加藤氏作）

曼荼羅

機守稲荷

永楽銭（中国のもの）

◎参考資料

・夕焼けの里を訪ねて
・恩方の歴史を知る会
・創如期の観栖寺
・八王子辞典
・歴史と浪漫の散歩道
・歴史散歩事典
・とんとんむかし　菊地正
・八王子市史
・新編武蔵風土記稿
・八王子の歴史と文化
・大日本人名辞書
・八王子ふるさとむかし話
・インターネット各ページ
・八王子市郷土資料館資料
・八王子市地図
・八王子市観光マップ
・昭文社地図

―メモー